カルイザワ芸術新聞

2019

第2号

絵・TOMOYA MORIIZUMI

「アートや横丁 文化の先に見る 軽井沢の未来」

8月4日、FIACS 主催第5回まちづくり講演会および交流会開催@友愛山荘

聖と俗とが交錯する軽井沢

各界の要職にある別荘民で、軽井沢の将来に貢献したいとする仲間が集まって設立した国際文化都市整備機構（FIACS）。同団体主催の講演会および交流会が８月４日に友愛山荘で開催された。

５年目の今回は、聖と俗の両面から軽井沢に触れるというのが主たる狙いだ。聖が宣教師や文化人、政財界人の避暑・静養の地としての軽井沢なら、俗はアウトレットモールなど一般大衆を引き付ける軽井沢か。ここでは聖なるアートに対し、俗なる横丁文化が提示された。

聖なる精神世界のアート

FIACS 理事長・水野誠一氏（元西武百貨店社長・元参議院議員）の主催者挨拶の後、長野県坂城町に生まれ世界で活躍中の若手アーティスト小松美羽が登壇。彼女の話や魅力を引き出す進行役は FIACS メンバーの玉置泰紀氏（KADOKAWA エグゼクティブプロデューサー）が務めた。

軽井沢には多くの美術館があるが、美術館巡りを目的に軽井沢に来るという人は必ずしも多くない。軽井沢の地とアートとの間をつなげる何かが不足しているからかもしれない。幼少の頃から地元の小さな社に通い続けた小松の毎日は神々への祈りから始まる。祈りこそ彼女の創作の原点であることが強く主張された。信州の土着の信仰とアートが結びつく場としての軽井沢が自然に見えてくれば、軽井沢のアート界にプラスになるとの予感を覚える対談となった。

俗なる物質世界の横丁文化

続いて FIACS 常務理事・小林洋志氏（博報堂プロデューサー）による研究報告が行われた。軽井沢駅から北方向には軽井沢本通りが伸びるが、その１本西側にも北に整然と伸びる通りがある。かつて地元商店で賑わった横「町」通りだ。軽井沢旧駅舎の再利用が始まったことを契機に、駅舎正面から真っすぐ伸びる横町通りを復活させたいというのが新軽井沢区住民の切なる願いである。

FIACS では新宿、渋谷などの発展に横丁が大いに貢献してきたとの観点から、横丁を残し発展させるための方策を研究してきた。例えば屋台の活用である。既に駅舎周辺にはお酒を飲める店がしっかり営業している。その雰囲気を広く PR し魅力化するために、現代風の屋台エリアの形成が主張された。聖なる軽井沢と矛盾することなく、俗なる横丁が育ち得るとの提案を興味深く聴いた。

講演会後、登壇者と参加者との交流会が行われた。FIACS 会長・鳩山由紀夫氏（元総理大臣）の総括に続き、あちらこちらで談笑の輪が広がる中、流れ解散となった。

昨年同様、講演会は区長・町議ほか地元識者を中心にご案内。８月の最初の日曜日の開催であったが、万平ホテル総支配人やレイクニュータウンの経営者、美術館や諸協会の関係者など数多くの方々の来場も得て、今年も盛会となった。

軽井沢書店

〒389-0102 長野県北佐久郡軽井沢町軽井沢（大字）1323　TEL.0267-41-1331　FAX.0267-41-1332
営業時間 9:00–21:00（水曜定休）※季節により営業時間が変更になる場合がございます。
夏期営業 ～８月 18 日（日）8:00–22:00

特集 1 ビジネス -business-

食 文化と情報のマッチング　ハナレ軽井沢

軽井沢駅北口東に、この夏ビジネスと食の拠点が 6 月に誕生した。ハナレ軽井沢がそれだ。昼間はフランスでシェフパティシエとして活躍した丸山敬寛氏（仏ブルゴーニュ地方サンタムールのレストラン「AU 14FEVRIER St.amour ミシュラン二つ星）が、軽井沢の食材を生かしたスイーツと飲物を、17 時からのバータイムでは、ビールやグラスワインを提供する。

また、注目したいのは、今話題のワーケーション体験だ。休暇で軽井沢に滞在する人が、観光や温泉の合間に仕事をするワークスペースとしてあらゆるワークグッズや環境を整えている。NTT コミュニケーションズが運営にかかわり、通信サービスを提供。現在は希望する企業に利便性を知ってもらうため無料体験ができる。10 月から本格的に予約有償で貸し出す予定。軽井沢は、リゾートテレワークを推進していることもあり、注目の施設になりそうだ。

驚くことにハナレ軽井沢は、ワークスペースの設備が充実しているだけでなく、ワークスペースに負けず劣らずのキッチンを備えている。そのわけは、一般社団法人日本ガストロノミー協会の軽井沢ライブキッチンとして、シェフ会員と地方都市とのコラボによるポップアップレストランなどのイベントも開催していることにある。週末には食のイベントが開催されるので、HP でイベントチェックが欠かせない。

▨ ハナレ軽井沢

軽井沢町軽井沢東 31-15
ハナレ軽井沢 1F
Tel: 0267-31-6153

特集 2 建築 -Architecture-

快適で美しい家　パッシブハウス

日本の住まいは、外観やインテリアデザインに対する施主の願いは実現しやすいが、居住空間の快適を得る施工が余り進んでいない。建築設計とインテリアデザインの会社を経営する菊地宏子さんは、軽井沢で寒さや暑さを我慢することなく自然に逆らわない持続可能な「パッシブハウス」を、「森のカフェ」として営業し普及活動をしている。宅内にあるカフェは、寛ぎながらパッシブハウスの快適性を感じられるスペースだ。

パッシブハウスには、３つの定義がある。まず太陽エネルギーの利用。つぎは、気密性の確保。完ぺきな断熱を施すことにより、暑さ寒さを外と遮断し、屋内は一定の温度を保つ。最後は、空気の循環ができること。生活の中で排出される二酸化炭素、気密性の高い空間であればあるほど空気の循環が求められる。計算されつくした換気機能がパッシブハウスの求める定義だ。

家は箱。機能の優れた箱であれば、居住空間の快適性が高く得られ人間の健康にも良い影響が与えられる。ただし暮らす楽しさも重要な要素。その点、「森のカフェ」は他と比してもデザイン性が高い。パッシブは必須条件で、そこにこれまで培ってきた自身のデザインへの想いもきちんと重ねた。美術関係の仕事をしてきた、カフェマスターで菊地さんのご主人蔵の美術関連書籍が、静かな時に彩を添えてくれる。

長く避暑地として愛された軽井沢に移住する人が増えている。このような理念をもつ住まいがあることを、移住を考えている人や建築を計画している人たちに知ってもらいたいというのが願いだそうだ。

▨ 軽井沢南ヶ丘
森のカフェ（パッシブハウス）

軽井沢町軽井沢 1052-662
Tel: 0267-46-8784

特集 3 学び -Learning-

軽井沢的 アタマの体操

国際高等セミナーハウス
（情報・システム研究機構 国立情報学研究所 NII）

1976 年に発足した「東京大学情報図書館学研究センター」が 2000 年に国立情報学研究所となり、初代所長となった猪瀬博氏（故人）。猪瀬氏が所有していた軽井沢南ヶ丘の別荘を国に寄附し 1997 年に設立されたのが「国際高等セミナーハウス」だ。ここでは毎年著名な講師が登場し、「軽井沢土曜懇話会」という講演会を開催している。

今年 7 月に講師として登場した村山斉氏は、超人気の物理学者。素粒子理論を専門としているが、すでに素粒子理論と聞いただけでお手上げになりそうな題材を、素人相手に飽きさせることなく、宇宙のことや、ヒトがどこから来たのかとか、人間を作っているものは原子だという話を、何も資料を手にせず、ひとつも淀むことなく語り続けた。子どもが聞いたら、物理の虜になること間違いない、と思う。

この「軽井沢土曜懇話会」は、猪瀬氏がセミナーハウスを造るにあたり、是非とも軽井沢の住民も参加できる懇話会をという肝いりで始まったと聞く。各分野の第一人者が惜しげもなく登場し、噛み砕いて話をしてくれるのだから、この懇話会のために東京から来軽する人が居るのも頷ける。なのに、軽井沢に住む人も別荘民も、いかにも残念なほどこの懇話会のことを知らない。毎年 3 回開かれるが、是非とも国立情報学研究所の情報を調べて、参加すべしと思う。軽井沢町が後援しているのだから、より身近に捉えていただきたいばかりである。

▨ 2019 年度 軽井沢土曜懇話会
Tel:03-4212-2145
第 3 回 10 月 5 日 (土)
15:00 ～ 16:45
「分かちあう心の進化」
講師：松沢 哲郎　氏

特集 4 本 -books-

□其の壱

追分流 VOL. 3
信濃追分文化磁場油や 編集発行

昨年の本紙でも紹介した「追分流」。ますます精度がアップして夏号が発刊された。長野県の元気づくり支援金活用で始まった「アーティスト・イン・レジデンス」事業が 3 年目になり、本号はこの活動を特集している。

元禄元年 (1688) に創業した油屋旅館。平成 24 年（2012）に NPO 法人「油やプロジェクト」が設立され今に至る。「文化磁場」として追分を真摯に守る「油や」。軽井沢にお越しの際は、足を延ばしてほしい。

※「追分流」を入手したい場合は以下にお尋ねください。

▨「追分流」
発行 : NPO 法人油やプロジェクト
Tel: 0267-31-6511

□其の弐

「軽井茶話」　塩川治子 著

軽井沢図書館前館長、現在軽井沢文化協会事務局長で作家の塩川治子さんが、文化協会発行の「軽井沢たより」に寄稿してきた軽井沢の様々なエピソードを一冊の本にまとめたもので、実に興味深い内容になっている。

年間 850 万人が訪れる軽井沢を、今日のような高原リゾート地で且つ高級別荘地にした由縁や歴史などが、一話ごとに濃い内容で教えてくれる実に頼もしい一冊である。

旅に役立つ旅行雑誌と共に、是非とも手に取り、来軽の際の知識本に使ってほしい。

▨「軽井沢茶話（かるいさわ）」
発行 : 軽井沢新聞社　1,500 円
※軽井沢書店で入手できます

特集企画 東風 体感したい宿 誕生

BOUTIQUE RESORT HOTEL ししいわハウス

来年に迫った東京五輪、首都圏から近い軽井沢も、宿泊者の獲得圏内に位置しているのは間違いない。そのためか、一昨年辺りからホテルや宿泊施設建設が町内各所で散見された。大型施設には、ならではの利便性もあるが、高原保養地軽井沢で最も当地の環境を受容できるのは、やはり森に在す宿だろう。

別荘文化に下支えされてきた軽井沢で、旅の一夜を別荘で過ごすことは得難い体験だ。軽井沢を肌で感じられる別荘のような宿、さらにそこが世界で活躍する建築家設計のこだわりの宿だったら。

ここで紹介する「ししいわハウス」は、自然と環境のチカラで心を満たすことが目的のホテルだ。調度品まで、建築家が設計している。室内には世界に認められた現代美術の絵画がおもむろに架けられている。こだわり抜かれた建築空間により、軽井沢での非日常を満喫できるホテルの登場だ。

建築設計者の企て

ブティックリゾートと銘打つこのホテルは、建築界のノーベル賞ともいわれるプリツカー賞を受賞した坂茂氏の設計。木造２階建ての宿泊室数は全１０部屋。緩やかなカーブを描く建物が、周囲の自然に寄り添う様が美しい。幹線道路に近いエントランスは、一見こぢんまりとした佇まいの全体像を想像させる。ところが、森の中に伸びる建物は、中庭に直結する中央のグランド・ルームがセンターポジションの役目を果たし、３つのクラスターで構成されるゲストルームと繋がる。箱ではない、緩やかな入れ物とでも表現すればいいのか。

坂茂氏は、災害被災地において様々なアイデアを提供し、被災者たちに寄り添う建築家としても知られる。加工の制限がある紙や木を積極的に使い、表現方法を模索する。

この坂氏が「ししいわハウス」で実現した、敷地内で最小限の樹木伐採で試みた、自然の曲線に馴染む建物。屋内でも、置かれる調度品のほとんどが坂氏の作品で、大小さまざまの紙缶が使われた丸みが優しいもので溢れる。ベランダの網戸、浴槽と部屋を仕切るアイデア、ベッド、灯り、どの一つにも、設計者の想いが込められている。壁には、60 年代に注目を集めた具体美術の日本人作家の絵画作品をはじめ世界の著名アーティストの作品がおもむろに飾られている。

ゆたかな時間

日常の対極に置きたいのが別荘という空間。別荘を拠点に環境を愛しむ。この軽井沢だからこそ、別荘を体感したい需要がある。この需要を満たす宿泊施設こそが、「ししいわハウス」の辿り着いた結論ではないだろうか。

一晩で、軽井沢を感じる。樹々や近くの山、鳥たちにリス。こうした自然環境と調和し、自らが解放されるゆたかな時間を持てる場所こそが、このホテルの存在価値だ。「ししいわハウス」なら、エネルギーをフルにチャージし、脳内に新たな発想をもたらすに違いない。

使い方も様々想定される。プライベートはもちろん、ビジネスシーンではグループでワーケーションプレイスに、また人生の記念日ブライダルでの思い出の場所にもなる。それぞれのゲストが、心の領域を広げ、新たな日常をもたらす宿。ソーシャル・ホスピタリティの概念を取り入れつつ、個々の客室空間のプライベートは心地よい満足感を得られる造りとなっていると開発責任者は語る。

ホスピタリティが軸の、自活的かつサスティナブルなプロジェクト

私たちの国が言う戦後、から 70 数年が経過した。世界各国は時間距離が縮まり、日本も他国籍の人々が暮らしのあらゆるシーンに溶け込んできている。もちろん私たち日本人も、世界各国で朝を迎え、夜を過ごしている。

世界各地では、最高級のホテルや環境に則したホテル、日本でも始まった民宿など様々な宿泊スタイルが旅人の疲れを癒している。

至れり尽くせりの宿泊サービスを望む人には、「ししいわハウス」は不本意かもしれない。リラックススペースのグランド・ルームを宿泊客全員が集まる場所と位置付ける。またクラスターと呼ぶ宿泊部屋の入口は棟ごとの共有。これらの設計の狙いはプロジェクトの信念に基づいていて、宿泊客同志のコミュニケーションを楽しんでもらいたいためである。一方で、各部屋はすべて違う設計で工夫され、坂氏の工夫が至る所に見られることをしても、可能なら全ての部屋で宿泊してみたくなるはずだ。

この「ししいわハウス」プロジェクトを運営するシンガポール企業の最高経営責任者フエイ・ホアン氏は、軽井沢から始まったホスピタリティ・コンセプトを掲げる宿泊施設を、今後も造る考えを示唆している。

最後に、「ししいわ」の名前の由縁、案外普通に、千ヶ滝地区のこのあたりの大字地名だそうで、どこかに獅子に似た岩があるらしい。

▨ ししいわハウス
2018 年 12 月完成
建築設計 坂茂
開発　HDHP GK 社
最高責任者　フエイ・ホアン
プロジェクト責任者　フィリップ・ワン
客室数　10 室
軽井沢町長倉 2147-646
http://www.shishiiwahouse.jp/
予約は website から

連載企画 1

美術館への誘い

軽井沢の美術館といえば、やはり現代美術コレクションで国内でも屈指のセゾン現代美術館を思い起こす。昨今は企画展も面白い趣向で、新進アーティストを取り上げる斬新な企画を打ち出している。セゾン美は軽井沢のアートの宝。

この夏、その魅力を伝えるミニマム展示をしているのが軽井沢書店だ。軽井沢書店は書籍とともに、関連アイテムの企画プレゼンに工夫がある。8 月いっぱい、セゾン美のコーナーを設けてグッズや関連書籍、企画展案内をしている。

▨お薦め本
「魂の場所」
セゾン美術館へのひとつの導入
三浦雅士著

連載企画 2

横目でみるアートな日常

南軽井沢から借宿まで 18 号線を迂回する 18 号線のバイパス。初夏の朝方、西（中軽井沢方面）から東（高崎方面）に向かい塩沢交差点を越えしばらく走ると、緑の樹々が車道の両側に溢れ、ストレスフリーで新鮮な心持ちにしてくれる道路である。

このバイパスの南ヶ丘へ入るあたりに、最近気になる建物ができた。商業施設かと見まがうような建築だが、完成しているようでも何ら告知されない。建物にはあの有名な跳ね馬のアイコンが！

ある日（好奇心が洋服を着ていると自負する）筆者がノコノコ訪ねてみると、車のガレージですと持主の紳士が答えてくれた。中には十数台の物凄いラインナップのネオクラシックカーが無造作に置かれている。おお！軽井沢ってところは、常にこうして期待を裏切らないね。こんなに道往くドライバーの好奇心を煽りつつも何気ない個人のガレージだなんてね。

連載企画 3

音楽文化の生きる街

これも当地が育んできた文化なのだろう。小さな街なのに、いたるところで音楽パーティやライブが開かれる。ミュージシャンも多くいるのだが、JAZZ セッションなど、あちこちで開催される。人気ヴォーカリストのお店はライブの度に多くの人が集う。音響設備が申し分のない「大賀ホール」では、首都圏で全くチケットの取れないような演奏会が当り前に開催されるのは何かの恩恵とも感じる。

▨ 軽井沢 ベランダ　軽井沢町軽井沢 601-1
チャーチストリート 1F　Tel:0267-41-1201

長野がなんだか暑いのは、この夏のアートが熱いから特集

▨! あたらしい展覧会の形、まちじゅうが美術館に !!#

千曲市出身・在住の現代美術作家、越ちひろによる新たなる挑戦としての展覧会が地元千曲市にて 8/1 より開催中です。

絵画は美術館という従来の展示施設を飛び出し、まちじゅうに溢れ出しました。商工会、商店街、企業、飲食店やカフェ、各種店舗、駅から文化施設まで、地元とのコラボレーションとして、そこだけのオリジナルの芸術作品が生まれました。まち全体が美術館、各店舗が展示室であるかのように、様々な作品を鑑賞しながら、町歩きを楽しめます。

書店ではブックカバーを制作、その原画が展示されます。ジュエリーショップでは作家のデザインからオリジナルジュエリーが制作されました。戸倉上山田温泉の旅館には温泉をイメージした新作絵画を展示。地元プロバスケットボールチーム、ブレイブウォリアーズとのコラボレーションではバスケットボールに直接ペイントされた作品が、ことぶきアリーナ千曲にて展示されています。

地元出身作家に向けた地元住民の応援、共に展覧会をつくるという意識、そして“芸術文化”をテーマとした町づくりを目指し、40 以上の施設・企業・学校・店舗・個人が参加し、協力のもと展開していきます。

まるで越ちひろの描く鮮やかな色彩がキャンバスから流れ出し、まちを人を染めていくかのように、次々と生まれてくる作品の数々と可能性に満ちた新しい展覧会の形としての期待ができます。

9/1 からは、更埴文化会館ホールに足場骨組を利用した誰も見たことが無い展示室に改造、本展覧会に向けて制作された新作絵画が登場します。また、期間中は作家滞在による横 9m 超の大作絵画の公開制作を行い、作家が描く行為そのものが芸術表現としての展示となります。

その他、あんずホールでのライブペインティング、文化施設アートまちかど、屋代駅市民ギャラリーでのファッションとアートの融合作品、来場者と共に作る参加型作品制作と幅広く、それでいて越ちひろにしかできない斬新なアートの数々をご覧いただけます。

■ 越ちひろ展 ミライノ色ミライノ光
–まちじゅうが美術館–

主催：千曲市、千曲市教育委員会
　　まちじゅうが美術館実行委員会

会期：2019 年 8 月 1 日〜10 月 31 日

※詳しくは以下 HP をご覧下さい。
公式 HP : https://chihiroten2019.com

◆お問い合わせ◆
アートまちかど Tel：026-272-4152

▨ 築 123 年の木造旧校舎に、妖怪あらわる !!
上原木呂の妖怪アート

中野市、一本木公園内に移築保存されている旧中野小学校校舎は築 123 年を迎える明治期の西洋建築物です。和風と洋風が融合する独特の空間、しかも 80 年以上教育機関として実際に使用されてきた校舎は独特の雰囲気を醸し出しています。

普段は銅石版画ミュージアムとしてささやかに開かれたこの施設をいかに地元住民、子どもたちに親しんでもらえる場にするかを目標に、実験的に企画を開催。手始めに、夜の学校のどこかオドロオドロしい雰囲気、そして目には見えないけれども、ふと感じることができる妖怪や精霊の気配そのものをアートとして表現しました。

新潟出身の美術作家であり、シュルレアリストでもある上原木呂（Kiro Uehara）が本展のために描き下ろした妖怪絵巻《妖怪國旅行記》。和紙に水墨によるこの作品は縦 2m40cm 横 21m の超大作として、各教室の壁一面を各覆うように展示されました。

夏の風物詩としての肝試し、お化け屋敷として不思議体験の感覚を味わいながらも、芸術表現だからこそ視覚化することができる伝統妖怪の姿、作家オリジナル妖怪の形が空間にひしめき合います。妖怪とは決して怖いものではなく、時にコミカルで、時に神聖な存在であるということが伝わってくるようです。

● 作家と中学生美術部員たち

廊下や階段、窓、隣の展示館にも、紙製のオブジェ、唐傘や下駄といった古民具を使用した妖怪オブジェが展示され、また地元中学校美術部の子たちのオリジナル妖怪画も混ざった一大妖怪空間となりました。

中野市の有形文化財としてのこの建造物は、市の教育機関としての長い歴史を持ち、明治初期の洋風建築の構造を今に残すという貴重な建造物です。このたびの企画を通じて、近隣の公園内にて保存管理されていること、その少し奇抜な旧校舎の存在感をあらためて伝える機会になればよいと望みます。

● 中野小学校旧校舎全景

■ 中野小学校旧校舎
上原木呂 夜の妖怪学校

主催：一般社団法人一本木公園木バラの会

会期：2019 年 7 月 13 日〜8 月 31 日

場所：信州中野銅石版画ミュージアム
　　長野県中野市一本木 495-6

Tel：0269-23-4780

▨ シンビズムという活動。長野県の美術館学芸員。

シンビズムという活動があります。県内ミュージアムのネットワーク化を促進する事業として、広く長野県中の美術館学芸員が集う場です。

いよいよ 2019 年、3 回目の企画「シンビズム 3」が開催されます。20 人以上もの学芸員が集まると、それだけ個々の個性、力も発揮され、それぞれが紹介する作家も、皆でつくる展示会場も、単館の力では到底及ばないポテンシャルを発揮してきました。“3” はさぞかし濃厚な展覧会になるのでしょう。

そして、この機会をつくり、学芸員たちを率いてきた本江邦夫監督が今年 6 月にお亡くなりになられました。おそらく参加する学芸員皆なにかしらの悲しみを抱えつつ、監督が目指した来年「シンビズム 4」までの道筋を歩むことになります。

しかし、監督が集めたチームは残っているし、少なくとも 3 年は引っ張ってもらえたのですから、監督が一緒にいなくとも、何をどのようにしたらいいかも漠然と感じてきているはず。最後に監督に「君たちはたいしたもんですよ」と言ってもらえるような学芸員としての努力を、作家に来場者に、見せつけてみようかと、そんな心持ちなのですが、、いかがでしょう、、ひとりの学芸員目線での言葉でした、、、失礼いたしました。

■ シンビズム 3
信州ミュージアム・ネットワークが選んだ作家たち
※くわしくは↓↓↓まで
公式 HP:https://shinbism.shinshu-to-asobo.net
Tel：0269-23-4780

◈編集後記◈

あっという間に一巡りした一年。2020 の東京五輪なんてずっと先、とか思っていたのに一年を切ったわけで。さて、われらが長野県は美術館数では全国一位で 120 を超える館がある。県の文化振興事業団は、これら個々で頑張る美術館のネットワークを構築して、SHINBISM という学芸員が選ぶアーティストの展覧会を開催している。これも来年 4 回目で一旦終了するらしいが、形を変えてでも是非とも活動してほしいものだ。「アート」は生活のそこかしこにあり文化を形成している。知りたいことだらけで焦っているうちに、また一年くらいさっさと過ぎるのだろうな。（嶋崎）

発行：一般社団法人 国際文化都市整備機構（ＦＩＡＣＳ）〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷 1-13-11 co-lab 千駄ヶ谷（株）エナジーラボ内
編集人：嶋崎 由紀子　デザイン：鈴木 一史